

十五世紀トスカーナにおける市民  
とその資産——Herlhy-Klapisch,  
*Les Toscans et leurs familles* へ  
関して——

清水廣一郎

一四二七年五月、新しい税制「カタスト」に関する法案が、フィレンツェの都市評議会 *Consiglio del Comune* ならびに *Consiglio del Popolo* を通過して、法令として成立した。

この結果、首都フィレンツェ及びピサ、ピストイア以下の従属都市、さらに農村地帯のすべての戸主による資産状況の詳細な申告と調査、それに基づく課税というカタストの膨大なシステムが動き出すことになった。この税制の計画は実に驚くべく巨大なものであって、従来の税制を根本的に改革し、すべての戸主の資産状況のあらゆる側面を明らかにすることによって、客観的かつ公正な税制を確立せんとするものであった。

従来の税制は十四世紀初頭にはぼ出来上ったもので、都市における間接税及びその収入を担保とした公債制度、農村における直接税エステイモを基礎としたものであったが、この時代にはもはや破綻し、完全に行き詰っていた。とくに十五世紀初頭以来たび重なるヴィスコンティ家との武力衝突は、備兵確保の

ための軍事支出の際限のない膨張と、それをまかなうための大商人からの借り入れの急増、それに伴う利払いの増大という悪循環を生み出し、收拾不可能な状態にまでたちいたっていた。都市の支配者である大商人層も都市財政と運命を共にしようとしていたし、これ以上間接税収入を増大させることも不可能だった。このように、都市国家の財政困難はまさに体制的な危機にまで至っていた。このような事態を救うべく抜本的な解決策としてこの新しい税制カタストが導入されたのである。

私は、前著『イタリア中世都市国家研究』(一九七五年)の第六章「十五世紀フィレンツェの税制改革」においてこの制度の概要について述べたので、ここではくりかえさない。ただ、フィレンツェ領に居住するすべての戸主が動産、不動産、債権などの全資産、債務のごときマイナスの資産、ならびに家族一人一人の名前、年齢などを申告し、それを基礎にして(たとえば、フィレンツェの場合、家族一人あたり二〇〇フィオーリノの控除が行なわれる)、各戸の「資産額」が算定されるものであったということだけを述べておくことにしたい。要するに、カタストは十五世紀トスカーナの「センサス」なのである。

さて、これらの戸主たちが提出した申告書と、官吏が一定の査定を行った上でそれを転記したカタスト台帳の膨大な集積は、フィレンツェ及びピサの文書館にはぼ完全な形で保存されている。申告された資産状況と実際のそれとの間には勿論差があるし、記載の内容にも地域的偏差があることは十分に想像される。しかし、この史料が十五世紀フィレンツェ及びトスカーナの社

会史・人口史研究にとって他に比類のない貴重な文書であることは疑いのない所である。しかし、何分にもその量が多く、これまでの研究はともすればその一部を利用するアト・ランダムなものでしかなかった。トスカーナ近代を特徴づける農業制度である折半小作制 *Mezzadria* の成立と拡大をカタストを用いて分析することを試みたエリオ・コンティの『フィレンツェ・コンタードにおける近代的農業構造の形成』も、一九六五年に第一巻および第三巻第二部が出ただけで現在まで中断している。このような状況の中で、アメリカ・フランス両国の歴史研究者の共同作業としてこの史料をコンピュータを用いて統計的に処理するという大事業が一〇年以上にわたる作業の結果ついに完成し、D. Herlihy et Ch. Klapisch, *Les Toscans et leurs familles: Une étude du casato florentin de 1427*, Paris, Presses de la Fondation Nationale des Sciences Politiques, 1978, pp. 728. とし、大冊として刊行されたことは、画期的ともいふべき意義を持っている。それはたんにフィレンツェ史あるいはトスカーナ史にとつて重要であるにとどまらず、ヨーロッパ前近代に関わる広い範囲の研究に今後大きな影響を及ぼすことは疑いない。フィレンツェ領トスカーナに住む二六万人、約六万戸の家計が詳細に分析され、百数十枚に及ぶ図表で示されているということだけでも、その規模が想像されるであろう。

このように、本書には膨大な情報が集められており、その分析は都市及び農村社会のあらゆる局面に及んでいる。ある評者は本書の書評のためには *equipo* が必要であると述べているが

(F. W. Kent, "Speculum", vol. 55, n. 1, 1980)「それも決して誇張ではないと思われるほどののである。したがって、本書の内容を簡単に概括することは不可能であるし、バランスのとれた評価が定着するのも将来のことに属する。ここでは本書の重要性を指摘し、私にとつてきわめて興味深いいくつかの問題に触れるにとどめたいと思う。

まず第一表は、フィレンツェ領トスカーナにおける資産の地域的分布を扱ったものである。総人口は二六万四千、フィレンツェの都市人口は三万七千となっている。ただし、ここには多数の外国人、傭兵、ユダヤ人、聖職者、さらに都市国家当局にとつて把握することが困難な貧民層が省かれているので、実際の人口は、特に都市においてはより多かつたはずである。

この二六万戸の総資産は一五〇〇万フィオリノ。不動産が八〇〇万、動産四五〇万、それに公債二五〇万となっており、動産と公債の合計は全体の半分に達している。これは、当時のトスカーナ社会における商業活動の優越的地位を暗示するものといえよう。

地域的に見ると、さすがに首都フィレンツェが圧倒的な勢力を持っていることが分る。人口上ではフィレンツェは全体の一四%を占めているにすぎないが、資産的には六四%を占めている。特に動産については七八%を、公債にいたっては実に九・七%を支配しているのである。また、一人あたりの資産を見ると、フィレンツェでは平均二七三フィオリノ、ピサ、ピストイアなどの六都市では六六フィオリノ、農村都市では三

第1表 資産の地域的分布

	フィレンツェ	6都市	15農村都市	農村	合計
戸数	9 946	6 724	5 994	37 266	59 890
%	16.2	11.2	10.0	62.2	100.0
人口	37 245	26 315	24 809	175 840	264 210
%	14.1	10.0	9.4	66.5	100.0
不動産	4 128 024	1 137 466	614 446	2 178 253	8 058 189
%	51.2	14.1	7.6	17.0	100.0
不動産	3 467 707	585 357	170 245	223 792	4 447 101
%	78.0	13.2	3.8	5.0	100.0
公債	2 573 378	3 438	1 888	1 337	2 580 041
%	99.7	0.1	0.1	0.1	100.0
総資産	10 169 109	1 726 261	786 579	2 403 382	15 085 331
%	67.4	11.4	5.2	15.9	100.0
控除額	2 504 041	332 763	135 341	321 205	3 293 350
%	76.0	10.1	4.1	9.8	100.0
課税対象資産	7 665 068	1 393 498	651 238	2 082 177	11 791 981
%	65.0	11.8	5.5	17.7	100.0

(単位フィオリノ)

二フィオリノ、それ以外の純農村地域にいたっては、僅かに一四フィオリノにすぎなかった。このように、首都と従属領域との間にいちじるしい経済的隔差が存在するが、当然の事ながらフィレンツェ市民の間にも大きな階層差が存在した。都市の家 *Heuge* のうち一五%は實際上無所有であったのに対し、富裕な一% (約百戸) が全体の四分の一を所有していた。かれらの資産は、純農村地域のすべての家三万七千戸のそれをしのいでいたのである。

中でも興味深いのは公債の問題である。表で見ると公債所有はほぼ完全にフィレンツェに集中し、その他は僅かな持分を所有しているにすぎない。また、フィレンツェの中でも全体の七八%の家は一切公債を持っていなかった。それに対して二% (約二百戸) の家だけで六二%の公債を所有していることが認められる (p. 231)。

十四世紀中葉における公債制度の成立については、私は、すでに前掲論文の中で簡単に述べておいた。要するに、都市国家の膨大な債務を一つの帳簿に記載し、規則的な利払い (最初は五%、後に一〇%、一五%のものできた) を保証し、同時に市民相互の売買を認めたものである。十四世紀の不況期における財政危機を切り抜けるために考案されたこの制度 (ヴェネツィアでは同様にモンテ、ジェノヴァではコンペラと呼ばれた) は、やがて安全な投資対象として上層・中層の市民の間に歓迎されることになった。公債の利払いは、結局の所、重要な財政収入である間接税が担保となっていたのであるから、公債所有

者は都市国家体制に密着することによって確実な収入を得ているということになる。また、公債の価格は市場を通じて変動するので、政治や経済の状況について十分な情報を持っている上層市民は、公債の投機活動においても特権的な立場にあったと考えられる。かれらは、また、経済的に弱い中層市民から公債を買いたくことによって安く手に入れることもできたし、利子の支払いにあたって優先的であったといわれている。すでに見たように、フィレンツェの約二百戸の家が六二%の公債を所有していた。これらの家は、商業活動にも深い利害を有する都市の支配層だったと考えて良いであろう。かれらの資産は、不動産、動産、公債とほぼ三分されている (p. 253, fig. 6)。かれらこそ、都市国家の運命と自分たちのそれとの幸福な一致 (共同体理念) を自覚しうる人びとにはかならなかった。

このような支配層において、家ないし同族団のつながりはきわめて重要な意義を持っていた。かれらは、都市社会における一種の「圧力団体」を形成していたのである。たとえばストロツィ家がある。五三家から成るこのグループは都市の課税対象資産の二・六%を所有していた (一戸あたり平均三七二四フイオリノ)。それに続いてバルディア家 (六〇戸で二・一%)、メディチ家 (三一戸で一・九%)、ベルツィ家 (二八戸、一・一%)、アルベルティ家 (一八戸、一%)、アルビツィ家 (二四戸、一%) の順になる。ルネッサンス期のフィレンツェを支配したこれらの六つの同族団は、合計すると都市の課税対象資産の一〇%近くを握っていた (pp. 251-2)。もちろん、この

ようなグループに属する家がすべて富裕だったのではない。グループ内部で一戸あたり平均資産額を越える財産を持っているのは、ストロツィ家で五戸、メディチ家で三戸、バルディア家で二戸であった。つまり、同じ姓を名のっているも、資産上はいちじるしい隔差が存在したのである。二、三の有力な家 *big name* を中心とし、それほど有力でない親族がその周囲に集っており、さらにその外側に親族関係にない多数の家が一種の被保護者として群っているというのが「圧力団体」としての同族団の構造であり、それがこの時代を特徴づける党派の対立の基礎をなしていたと考えて良いであろう。

次に、フィレンツェ及びその他の六大都市における職業構造を示す第二表を見ることにしたい。注意しなければならないのは、カタストにおける資産状況の申告にあたって、すべての人が自分の職業について述べている訳ではないということである。フィレンツェの場合四三・九%、ピサでは四四・六%、ピストリアでは六二・五%が職業を申告していない (p. 255)。職業を知りうるのは、市民の半数にとどまるのである。ここに極めて難しい問題が出てくる。たとえば各方面にわたる経済的利害を持っている最も有力な階層の場合、職業を申告することはほとんどない。また、職人層の場合でもいくつかの活動を並行して行っている場合や、頻繁にそれを変える場合があって、これを一つの職種で把握することは必ずしも適当ではない。しかし、約半数の市民が行った職業に関する申告から全体の傾向をうかがうことは決して不可能ではないだろう。

第2表 都市においてもっとも人数の多い職種

	フィレンツェ	ピサ	ビストイア	アレツォ	プラート	ヴェルラ	コルトーナ
1	公証人 307 (8.3)	靴屋 76 (10.4)	靴屋 50 (11.3)	靴屋 54 (13.1)	自作農 43 (12.2)	小作農 116 (34.7)	自作農 45 (13.8)
2	ローネ職員	公証人	自作農	毛織物業	毛織物業	自作農	毛織物業
	261 (7.0)	62 (8.5)	48 (10.9)	39 (9.5)	36 (10.2)	82 (24.6)	26 (8.0)
3	織布工	自作農	公証人	公証人	折半小作	毛織物業	靴屋
	261 (7.0)	44 (6.0)	47 (10.7)	29 (7.0)	34 (9.7)	27 (8.1)	22 (6.8)
4	靴屋	皮なめし工	かじ屋	かじ屋	靴屋	公証人	公証人
	244 (6.6)	41 (5.6)	32 (7.3)	21 (5.1)	33 (9.4)	25 (7.5)	17 (5.2)
5	毛織物業	小作農	毛織物業	胸衣製造工	公証人	折半小作	香料商
	222 (6.0)	39 (5.3)	21 (4.8)	17 (4.1)	19 (5.4)	21 (6.3)	14 (4.3)
6	梳毛工	毛織物業	香料商	労働者	かじ屋	ローネ職員	肉屋
	202 (5.4)	33 (4.5)	17 (3.9)	16 (3.9)	18 (5.1)	10 (3.0)	11 (3.4)
7	刷毛工	香料商	理髪師	香料商	製粉業者	乾物商	かじ屋
	188 (5.1)	31 (4.2)	13 (3.0)	12 (2.9)	15 (4.3)	6 (1.8)	11 (3.4)
8	大工	理髪師	大工	大工	香料商	炉業者	聖職者
	169 (4.3)	31 (4.2)	13 (3.0)	11 (2.7)	13 (3.7)	6 (1.8)	10 (3.1)
9	亜麻布業	仲買人	労働者	食品商	大工	大工	食品商
	149 (4.0)	25 (3.4)	11 (2.5)	11 (2.7)	13 (3.7)	5 (1.5)	8 (2.5)
10	染色工	金細工師	桶屋	肉屋	小作農	製粉業者	鞍製造業
	117 (3.1)	23 (3.1)	10 (2.3)	11 (2.7)	10 (2.8)	5 (1.5)	6 (1.9)

最初の数字は戸主の数。カッコ内は人口に対する比率(%)

まず、すべての都市に共通な、いわば地域性の希薄な職業がある。たとえば靴屋、大工、毛織物業、香料商、公証人などは、いずれもほとんどすべての都市で数多く見られる職業であって、その地域の需要を満たすものであったと思われる。特にどの都市にも、また農村にすら多数の公証人がいる事實は、十五世紀トスカーナにおける社会的習慣を示す興味深い事例である。プラートとコルトーナを除けば、いずれの都市でも人口千人あたり八名から一〇名の公証人がいるのである。

次に、それぞれの都市の地域的・機能的特性と関連する職業がある。たとえばフィレンツェにおいては、多数のローネの職員(行政職員)がいるが、これはトスカーナの首都としての機能に関係している。ただし、この行政職員というものは、決して上級の行政官ではなく、番兵、執達吏、触れ役、笛吹きなどの下僚層のことである。かれらの社会的地位も、経済力もきわめて低かった。第三表はフィレンツェにおける二四の主要な職種とそれに属する人びとの平均資産額を示したものであるが、ローネの職員はそれの中で最下位に属する。上級の行政官は、他都市から招聘され

第3表 フィレンツェにおける職業別平均資産

順位	職業	平均資産
1	銀行業	8,748.4
2	毛織物商・織元	3,301.0
3	その他の織物	1,696.2
4	法律家	1,079.2
5	香料商業	1,019.1
6	製紙業	598.7
7	医師・理髪師	460.9
8	皮革商	427.9
9	陶器商	384.8
10	食料商家	379.1
11	美術家	348.0
12	金工職人	314.7
13	皮革職人	290.9
14	大工・指物師	228.1
15	石工・建築家	168.7
16	農業	166.6
17	金属工業及び商業	164.9
18	聖職者	160.8
19	衣服職人	154.6
20	奉公人	109.5
21	運搬人	105.6
22	毛織物準備工程	103.1
23	その他の織物の準備工程	94.2
24	コマーネ職員	80.4

(フィオリノ)

る何人かの裁判官(ボデスタなど)を除けば、上層市民たちが「市民政治家」として生業のかたわら勤めることがたてまえとなっていたので、これらの表に「職業」として現われることはない。

また、フィレンツェは、周知のように織物工業の都市として重要であった。第二表の織布工、刷毛工、紡毛工、染色工などは、いずれもこの工業に従事するものである。ただし、かれらには職人と、何人かの職人を雇傭する企業主の双方が含まれている可能性がある。今後さらに検討が必要であろう。とにかく、フィレンツェの織物工業(主として毛織物)がトスカーナにおいて圧倒的な地位を占めていたことは確かである。

他の都市に較べると、ピサは独特な性格を持っていることが認められる。まず、仲買人 *soffale* が二五人もいることは港

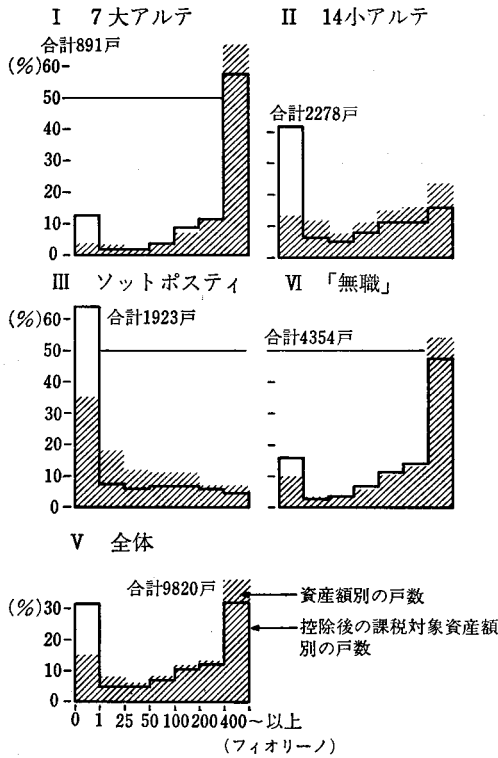
在し、奢侈品の取引きにおいてフィレンツェに次ぐ地位を占めていた。十三世紀末以降ジェノヴァとの抗争に敗れたピサは経済的に衰微したと考えられているので、このような奢侈品取引きの活況はやや意外である。ピサの開港都市としての機能は依然として維持されていたのであろう。

そのほかでは、ピストイアにはかじ屋が数多く存在し、この都市における金属工業の重要性を示しているし、プラートには一五名の水車屋がいて、製粉や織物の縮絨を行っていたことを知ることができる。また、プラート、ヴォルテッラ、コルトーナは農業都市的な色彩が強く、特にヴォルテッラでは職業を申告した市民の半数以上が農業に従事していたのは、驚くべき事実である。

以上のように、十五世紀トスカーナの経済活動は、地域的

町の特徴である。また、マレンマ地方はこの時代にはまだほとんど開墾されておらず、広大な放牧地となっていたが、ここで飼育される牛がピサの皮革工業の原料を提供していた。この表には現われていないが、この都市には多数の金細工師、絹織物商、毛皮商などが存

図 職業類型別の戸数と資産分布



まず注目されるのは、七大アルテのメンバの資産分布と「無職」のそれとがいちじるしい類似性を示していることである。両者とも四〇〇フィオーリノ以上の資産を持つ富裕層が極めて多い（前者で全体の六〇％、後者で五〇％を越えている）。つまり、「無職」の中には、土地所有、商業投資、公債投資などで生活している「ランティエ」であって、階層的には七大アルテのメンバと同一の存在が多数含まれている。十三世紀末以来、フィレンツェの都市国家は七大アルテに結集している大商人層の支配する所であったといわれているが、資産分布から見るとおそく間違いないであろう。それと共に、「ランティエ」の社会的比重が極めて高いことは興味深い問題である。前にも触れたように、かれは公債投資

化と相互依存性という二面的性格を有していた。それを統轄し、トスカーナ経済という枠組の中に各地域を位置づけるというのが、首都フィレンツェの機能だったといえるであろう。将来のトスカーナ大公国の基礎は、このように百年も前から準備されているのである。

さて、上に見た職業について、特にフィレンツェの場合を別の視点から分類したのが次の図である。ここではフィレンツェの九八二〇戸を（一）七大アルテ（七大ギルド）羊毛、絹織物、カ

リマール、医師・薬種商、両替商、法律家・公証人、毛皮商、（二）四小アルテ（亜麻商、大工、かじ屋、靴屋、仕立屋、肉屋など）、（三）ソットポステイ（アルテの結成を認められていない職人、労働者）、（四）「無職」の四つのグループに分け、それぞれ資産状況によって分類している。

まず注目されるのは、七大アルテのメンバの資産分布と「無職」のそれとがいちじるしい類似性を示していることである。両者とも四〇〇フィオーリノ以上の資産を持つ富裕層が極めて多い（前者で全体の六〇％、後者で五〇％を越えている）。つまり、「無職」の中には、土地所有、商業投資、公債投資などで生活している「ランティエ」であって、階層的には七大アルテのメンバと同一の存在が多数含まれている。十三世紀末以来、フィレンツェの都市国家は七大アルテに結集している大商人層の支配する所であったといわれているが、資産分布から見るとおそく間違いないであろう。それと共に、「ランティエ」の社会的比重が極めて高いことは興味深い問題である。前にも触れたように、かれは公債投資

を通じて都市国家の運命に深く関っていたのであろう。ただし、この両者とも有力な家だけで構成されているのではなく、無産者ないしそれに近い者をも含んでいることが注目される。一方、一四小アルテのメンバーは、四〇〇フィオーリノ以上の資産を持つ有力者四百数十戸と並んで、無産に近い者約三百戸を含むなど、比較的均等に分布している。それに対して、ソットポストイにおいては無産者が三十数%を占め(六百数十戸)、もっとも高い比率を示しているが、決して富裕な者もない訳ではない。七大アルテ(及び「ランティエ」)、一四小アルテ、ソットポストイという具合に都市の階層を分けることは、全体の傾向を見るにあたって有効であることは間違いないが、決してそれを固定的に把握してはならないだろう。この点で本書は、社会階層についてとすれば概念的に割り切って理解しようとする我々に反省を迫るものなのである。

以上本書の膨大な記述から主として都市における資産と職業分布に関わる部分を紹介し、問題点を探ってみた。しかし本書の記述はきわめて多岐にわたり、その提起する問題は広くかつ根本的なものである。特に人口構成の問題や家族形態、ならびに階層別に見た家族周期などは、都市論にとって重要なもので

ある。別の機会に検討したいと思う。

最後に一つつけ加えておきたいのは、カタストに現われたデータを取り扱うにあたっては財産申告書が実際にいかなるプロセスをへて作成されたかという問題が全体の解釈に大きな影響を及ぼすということである。その点を測定するためには、当時の行政技術の細部、民衆の生活慣行や法意識の森の中へと分け入って行く必要があるだろう。この史料の信憑性をめぐって著者たちが行っている検討は着実であり、信頼性が高い。それにもかかわらず、重要な、根本的な問題がなお残されているというのも、また事実なのである。

(1) 整理されたデータは磁気テープの形でウィスコンシン大学(マディソン)と社会科学高等研究院(パリ)に置かれている。

(2) 私の管見に入った書評としては、*Speculum* のほか  
 v. M. Mallett (*The Economic History Review*, vol. 32, n. 2, 1979); A. De Maddalena (*Rivista Storica Italiana*, Anno XCII, Fasc. I, 1980) # 47 Ph. Braunstein (*Annales. E. S. C.*, 35<sup>e</sup> Année, n. 1, 1980) § 三がある。

(一九八〇・九・六) (広島大学助教授)